話をしても息子も妻も関心を持たぬので、家ではあまり話をしておりません。また、戦友会でも「誰誰が亡くなった」との情報も来ますが、この頃は年賀状も年と共に少なくなってきました。しかし、当時の状況や労苦は、後世まで伝えられることに意義があると思います。

ルソン、仏印無線通信隊

福岡県　橋　川　篤　美

私は福岡県行橋市入覚七三一で生まれ育ち、祖父、父母、長男の私、弟四人、妹三人の大家族であった。しかし、当時は三世帯家族、子供の多いのは普通の構成であった。大正十年三月八日生まれなので昭和十六年徴集者として兵隊検査を受けたが第二乙種、それが第一乙種に編入された。

昭和十七年六月十二日、教育召集令状が届けられ西部第五三部隊へ入隊したら、無線通信隊だった。従って一般歩兵教育はほとんどなく、銃剣術は防具を付けて「前へ、後へ」とのほんの初歩だけ。射撃は実弾五発射っただけ。使役もなく、ひたすらに無線の技術だけで、通信を受ける、打つだけ。それを打つのは一分間に八〇字、受けるのは一〇〇字を出せるように猛訓練された。肉体的な教練はないのだが、暑い最中、講堂に約一二〇人がいて教育を受けました。暑いので眠くはなるし、汗はダラダラ顔から垂れるから、通信紙へ書いた数字がベロベロになり、教官から椅子で頭を叩かれる。

内務班に帰れば古兵から「お前達は昼間楽をしているから」と叩かれる。自分では納得出来ない、連帯責任だと叩かれる。しかし、可愛想に思ってくれる古兵もいて、内緒で菓子を食わせてくれた時は、本当に嬉しく今でも忘れられません。きつくされた兵隊、優しくしてくれた兵隊、ともに忘れられない。

内務班には有線兵もいて、馬も三頭いたから厩当番もした。家には耕作用の牛を飼っていたが、馬を扱ったこともなく、噛む、蹴る、癖の悪いのもいるからこ

わかった。馬を知らぬ者は私を含めて随分いた。初年兵一二〇人全員無線だった。入隊した西部第五三部隊は久留米連隊の中にあり、我々の通信隊は橋本隊といい、六個班あり一個班は五〇人ぐらいだったが、その中には古参兵がいたので、先程申したとおり、自分の責任で叱られ、叩かれたことはなかったが、他の者との連帯責任で、食事当番に間違ったら古兵ばかりでなく班長にもやられる。

これは先任兵長が軍曹に呼ばれ、食事当番全員が内務班に集められ、全員モップで叩かれた。私は兵長の隣にいたので、軽く叩かれ、「お前はどこそこへ行け」と用事を作って逃がしてくれたこともあった。寝てから「兵長殿ありがとうございました」と小声で言うと「いいよ」と一言言ってくれたので心の中で感謝していた。しかし、寝床の中に入って泣いたことが何回もあった。

私は満期になるまで、可愛がってもらった。歩兵だと一期三カ月であるのに、無線兵は一人前になるのに六カ月かかったが、召集解除になり家に帰ったら祖父は喜んでくれた。

私は召集になる前は、駅の前にあった補給廠に勤めていたので、兵器、被服等の守衛が任務であった。一昼夜勤務であるから仮眠はある。一晩八人で巡察をしたり、展望台で監視もする。我々以外は全部軍人で、事務所には尉官、一般は下士官で、敬礼もするし、勤務状態は軍隊とあまり変わりなく、軍隊生活は補給廠勤務の延長のようなものだった。召集解除になったのでまた、元の補給廠勤務に戻った。

昭和十八年六月、再度の召集となり、西部第五三部隊の橋本隊へまた入ることとなった。また通信隊勤務となったのだが、昭和十八年十二月、船舶通信、暁第二九五五部隊に転属となり広島へ移った。召集の六月一日付で上等兵に進級した。

教えられた私が、今度は初年兵の教育をしたり、乙種幹部候補生の教育助手として、通信だけでなく、一般歩兵の教育もした。その頃、幹部候補生が出るので、「被服を洗濯しろ」と言ったのに、襦袢一枚を洗濯していない者がいたので、げんこつで叩いたらその候補

生の歯が折れてしまった。私が衛生勤務している時、その生徒が営外へ歯の治療に出て行った。それを見て、私は教育係軍曹に謝ったが、軍曹は「それは仕方ない」と許してくれた（制裁で怪我をさせたわけだが）。それ以来、私はビンタをとったことがない。

私が戦地へ行く二日前、人事係准尉が私を呼んで、私を当番と間違え使ったことがあったので、「橋川苦労かけたな、外出したいのなら、公用外出をしてよいぞ」と言われ、お寺にいる叔母の所へ別れに行かせてもらえた。私は勤務でも訓練でも元気が良かったので、可愛がって目をかけていてくれたのだ。

昭和十九年六月三日、「徳島丸」で宇品港を出帆し門司港に寄港、バシー海峡附近が危険であるということで、台湾の高雄で一泊しルソン島へ向かった。我々は船舶兵として編成された部隊であり、三十八隻の船団であった。二、三日後、歩哨で、船のマストの上で魚雷警戒のため一時間交代で監視するのだ。その時の、バシー海峡の波浪は小山程大きく、南十字星と北極星が交互に見える。そのような大きな波だから生きた心持ちもしなかったが、歩哨を無事交代し、二、三時間過ぎた頃、前方の海に真っ赤に火柱が立ち、我が船がやられたようなショックを受けた。バンという地震のような響きであり、隣の我々の船の舳先の船が魚雷か何かで轟沈し、火柱が立つとそのまま船は跡形もなく沈んでしまった。

我が船の甲板にいた兵隊が、飛んできた破片が当たり即死してしまった。その兵隊が何処の者かは判らなかったが、水葬式があり、可愛想やら恐ろしい気持ちがした。六月二十日頃、フィリピンのマニラ港へ上陸をした。

二日後、マニラ市北方向三〜四キロの地点の送信所に六人で勤務についた。受信所はマニラ市内の本部にあり、勤務地から西方五〜六キロに我軍の飛行場があったので九月頃から朝食時頃一回、午後一回、毎日その市内飛行場目当てに、米軍のグラマン戦闘機が来襲、数日後には双胴のロッキードP38が襲来した。我が通信所には爆弾は落ちなかったが、機銃掃射を受け、生きた気持ちはなかったが、通信勤務に一生懸命であっ

た。また、元気で勤めのできることは、父母や先祖のお陰と思い励んでいたのだ。

昭和十九年十二月十日、我が中隊百二十人は寺内元帥の南方総軍と共に、海軍の食糧艦「間宮」にて、海防艦五隻に守られ、同月十三日、仏印（ベトナム）のサイゴン港に上陸し、編成替えにより隊長以下十二人で南ベトナムのツーラン市で勤務することになった。受信所は市内で、送信所は一キロ離れたグランドに設置し、暗号班は別に四人一組で、受信所、送信所の交代勤務であった。

昭和十九年十二月の末頃より、グラマン、ロッキード機によって爆撃、銃撃、機銃掃射を受けるようになったが、幸いに我が受信、送信所には被害はなかった。

ある日、ツーラン市大空襲という情報が入り、宿舎の前で朝洗面をしていると、初年兵と二人で、爆音がするので空を見上げたら、ボーイングB17が、鳩ぐらいに見えた。二人共「あ…！」と叫び、見ると山羊の糞みたいな黒い物を落している。その時「こら！　防空壕」と言って飛び込んだのと同時に、大音響がした。受信所の横三～四〇〇メートルの所のツーラン駅の構内、線路に四、五十箇の小型爆弾が落ちたのだ。

海岸沿いの砂地であったため被害はなく、もし投下目標が違えば我々は今日の日は無かったと思う。あの高度なので駅の線路は大いに被害を受け、身の縮む思いでありました。

昭和二十年三月六日「明号作戦」において仏領インドシナのフランス軍を制圧したのだが、その時私は、機材返納でサイゴンの本部へ行くよう命ぜられて、日が暮れて一人で貨車に乗っている時、外では銃声がして、汽車から出られず宿舎に帰り小隊長に聞くと、「フランスを制圧できたから、そのまま任務を続行せよ」と言われ、無事機材を本部に届けることができ、ツーランに復帰した。仏印全部はその後日本軍に降伏し、我が軍が仏印を統治していた。

しかし、その後も、戦況は日本に不利となり、頻繁に空襲を受け、各地に被害が続出し、八月十五日、我々は天皇陛下のお言葉を受信し終戦を知った。「日本は負けたのだ」と思うと残念であると思ったが、これで

空襲などの日々の苦労から逃げられるのかと思うと、複雑な気持ちであった。

数日後から、体力作りのため、午前中は農耕作業に従事し、午後は野球、相撲などで復員の日を待つばかりであった。九月末になると中国兵が進駐し武装解除を受けたが、十一月頃、兵器その他を中国軍に引き渡し、その後は中国兵監視の日々となり、この目で敗戦の様相を見、敗残の憂き身をつくづく感じ、残念でたまらなかった。

昭和二十一年二月頃、復員のため、日本軍全部隊がハノイ地区に集結を命ぜられた。途中各駅、鉄橋は破壊され、荷物を貨車への積みかえなどしつつ、十三日ハノイに着き、各中隊は同じ場所に独自で鉄状網を張り、衛兵所を設置し復員の日を待つこと二カ月。その間、我が身体は衰弱してこれからの生活、内地の状況等を心配し、精神的にも苦しい日であった。

四月十一日頃、南ベトナムのハイフォン港より引揚船にて出帆。十一日ぐらいの日時を要して、故国日本の風景を目のあたりに見、感激と喜びに戦友同士手を握り合いながら船内での厳しくも楽しくも敗戦をつくづく感じつつ名古屋港に着岸した。検疫、消毒を受け一泊し、汽車賃五〇〇円をもらったが、戦友との別れがつらく、また逢う日を誓いながら、各々が故郷へと分れ分れになって帰った。

途中の駅で軍人会に迎えられ列車内では「兵隊さんご苦労さんお帰りなさい」と言われ胸が熱くなるのを感じながら、九州へと満員列車の旅を続けた。

我が家に着くと、祖父、父母、兄弟が非常に喜んで、復員を祝ってくれた。初めに言ったとおり私は橋川家の長男として生まれ、祖父、父母、男四人、女三人の十人家族だったが、復員後は住友金属小倉製作所に勤務し、昭和五十一年退職はしたが、現在でも元気で働けるということは皆様方のお陰と、感謝しつつ頑張っている。

【解　説】

陸軍船舶部隊は一般には暁部隊として知られているものであるが、大本営直轄の船舶司令部の隷下諸部隊

である。

終戦時の船舶司令官は陸軍中将佐伯文郎であり、橋川篤美氏が再召集された昭和十八年六月時には陸軍中将鈴木宗作であった。

船舶司令部は昭和十七年七月七日軍令陸甲第五十二号により船舶輸送司令部を復帰させ新たに編成され、船舶司令官は七月十四日大陸令第六百五十九号をもって参謀総長に隷属した。船舶部隊の大部は作戦軍に配属され、その指揮下にあって作戦に従事したのである。

船舶輸送司令部司令官は、昭和十五年九月二十八日佐伯文郎中将であった。その当時の船舶通信連隊長は昭和十六年八月五日、陸軍中佐日山千里である。

大東亜戦争開始時の船舶輸送司令部は前記のごとく大本営、参謀総長直属隷下であり、その隷下には、中支那船舶隊、第一、第二揚陸団があり、通信連隊は、勿論南方軍にも無かった。しかし、昭和十七年には船舶固定通信連隊は船舶司令部隷下にある。

その後、南方軍通信隊編合があり、南方軍通信隊司令部がおかれ、第一通信隊、第二通信隊、第三通信隊、第四通信隊及び第一通信隊本部が設置されていた。これとは別に、船舶通信連隊は南方軍隷下の下藤木茂夫大佐が連隊長となっている（昭和十九年二月二十六日）。

通信関係部隊は、内地・門司の第一船舶輸送司令部、昭和十八年八月司令官田辺助友少将の隷下に船舶通信第二大隊、上海の第二船舶輸送司令官伊藤忍少将の隷下に船舶第四大隊。マニラの第三船舶輸送司令官稲田正純少将隷下に、藤木武夫連隊長の船舶通信連隊があった。第三船舶輸送部司令官は、昭和二十年四月、渡辺三郎少将となるも、船舶通信連隊長は藤木武夫大佐であった。

昭和十九年十二月の船舶司令官の隷下は船舶司令部、教育船舶兵団、船舶砲兵団、第一船舶輸送隊、第二船舶輸送隊、第三船舶輸送隊（第十二・第十三船舶団）、第五船舶輸送隊、船舶衛生隊であった。

昭和二十年八月、終戦時の第三船舶輸送隊は南方軍直轄であり、船舶通信連隊（暁第二九五五部隊）は当然南方軍の隷下で終戦を迎えたのである。昭和二十年八月終戦時の大本営直轄、参謀総長隷もとの船舶部隊

は、船舶司令官のもと、教育船舶兵団、船舶砲兵団、第一、第五船舶輸送隊、東京船舶隊、第十四・第十五・第十六船舶団、船舶衛生隊である。第二船舶輸送隊は支那派遣軍総司令部の隷下であった。

また、通信関係諸部隊の終戦時の数は、

船舶通信連隊　一、船舶固定通信連隊　一、

船舶通信大隊　六

（第一・第二・第三・第四・第五・第六）、

船舶通信補充隊　一　　である。

第三船舶輸送司令部（暁第二九四四）は昭南（シンガポール）にあったが、同司令部の支部は次である。

ボルネオ支部　第七〇碇泊場司令部、

馬来支部　昭南、南スマトラ支部　パレンバン、

ジャワ支部　スラバヤ、ビルマ支部　マンダレー、

マニラ支部　ルソン島北部、

セブ支部　レイテ・ネグロス・セブ・パナイ、

パラオ支部　パラオ、

泰支部・バンコク第一支部　マルメラ、

同　　第二支部　ビマ、

同　　第三支部　ビートン

このように陸軍船舶部隊、所謂「暁部隊」は現地軍の指揮下にあって下積みの任務につき、軍人は勿論、雇傭人軍属等多種の専門職をもつ者、あるいは単なる、徴用軍属者を隷下、指揮下にして戦った。しかも、兵力も装備も充分でないため、空・海からの敵の攻撃に対し抗戦力少なく、これに比例して多数の犠牲者を出している。これら各隊、各船舶の連絡、命令下達、報告受理をするのが船舶通信連隊及びその隷下の諸隊であった。橋川氏の通信連隊は南方軍の指揮下にあり、末期フィリピン、ルソン島マニラから、仏領印度サイゴンへと転出でき、南方軍の船舶輸送の通信という重要な任務を負ったのである。しかし、もし、ルソンに留まったなら、第十四方面軍、山下将軍の下で銃を執って戦う羽目になったのであろう。

次にマニラ〜サイゴン間に乗船した軍艦「間宮」につき概説をする。

「間宮」は特務艦であり給糧艦である。同型は「間宮」のみ一隻。

完成　大正十三年（一九二四年）

排水量一五八二〇トン、長さ一四四・七八メートル

幅一八五九メートル、平均吃水八・四三メートル

機関出力一万馬力、速力一四ノット、

乗員二八三人

大正十二年度　計画、製造　川崎造船所

大正十一年十月　起工、大正十二年十月　進水

大正十三年七月　竣工

昭和十二年～十三年　支那事変従事

昭和十六年～十九年　第二次大戦大戦

トラック・パラオ・比島へ糧食補給任務

昭和十九年五月六日　五島列島南西にて米潜水艦の雷撃で損傷、佐世保工廠で修理

昭和十九年十二月二十日　サイゴンから比島方面に補給途中、南支那海東沙島西方で米潜水艦ＳＥＡＬＩＯＮ号の雷撃を受け沈没

なお、旧海軍恩給加算調書によれば次である。

大正十四年三月二十八日　佐世保～旅順、以後青島・廈門・舟山島・秦皇島・南洋群島・青島・馬鞍群島等にて外国鎮戍、支那事変・遠洋航海等

昭和十二年八月十九日～中支・北支・南支等戦務

昭和十六年十二月十二日～戦地戦務（殆ど戦務甲）

～昭和十九年十二月二十日　沈没

昭和二十年二月十日　除籍

給糧・運送（雑用）艦の主なものは、ほかに「伊良湖」「野崎」「杵埼」「早埼」「白埼」「荒埼」「鞍埼」「二代宗谷」があった。